水戸藩駒込邸の研究　藩邸内外の景観と造園の検討

原　祐一

はじめに

東京大学本郷キャンパスは、本郷地区が加賀藩邸・富山藩邸・大聖寺藩邸、浅野地区と弥生地区、隣接する住宅地が水戸藩駒込邸（以下、駒込邸）に該当する。本郷地区が加賀藩邸であったことは、赤門、心字池（現三四郎池）、地境に残る石垣等からうかがい知ることができ、駒込邸があったことは農学部正門横に設置されている「朱舜水先生終焉之地」碑(1)、二〇〇八年、浅野地区情報基盤センター敷地に保存修復を施して展示された徳川齊昭建立の「向岡記」碑(2)によってうかがい知ることができる。

本論で検討する駒込邸の研究では、これまで駒込邸を江戸藩邸の一つとして位置付け、小石川邸、小梅蔵屋敷等を含めた藩邸の役割と変遷が検討されている(3)。駒込邸は彰考館の前身の史館が置かれ、明の学者朱舜水の屋敷があった。また、徳川頼房、徳川光圀、徳川齊昭をはじめとする歴代藩主の研究中で駒込邸が取り上げられることはあるが、小石川邸、小石川後楽園のように藩史研究や庭園史のなかで取り上げられることはあまりなかった。

東京大学埋蔵文化財調査室は、浅野地区タンデム棟建設予定地の調査以降、駒込邸の発掘調査を行ってきたが、駒込邸の絵図が存在しなかったこと、明治時代以降の開発によって遺跡が破壊され、藩邸の分析に不可欠な建物跡の遺構が失われたため「殿舎（表御殿・裏御殿）」区域と「長屋・役所」区域の位置が不明で、遺跡の評価が困難であった(4)。しかし、二〇〇七年十一月、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（筆者蔵）が発見される（図1・2）。この絵図を発掘調査の成果、地籍図の分析、駒込邸関連史料等から総合的に検証した結果、駒込邸の絵図であることは間違いなく、遺跡の評価と駒込邸の研究に新たな課題を与えた。

本論は『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究報告書9　浅野地区Ⅰ』の成果に、駒込邸の庭園と景観を描いた『向岡記』（財）水府明徳会彰考館徳川博物館蔵）の分析を加え水戸藩駒込邸内外の景観と造園について検討を行う。

図１　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（筆者蔵）

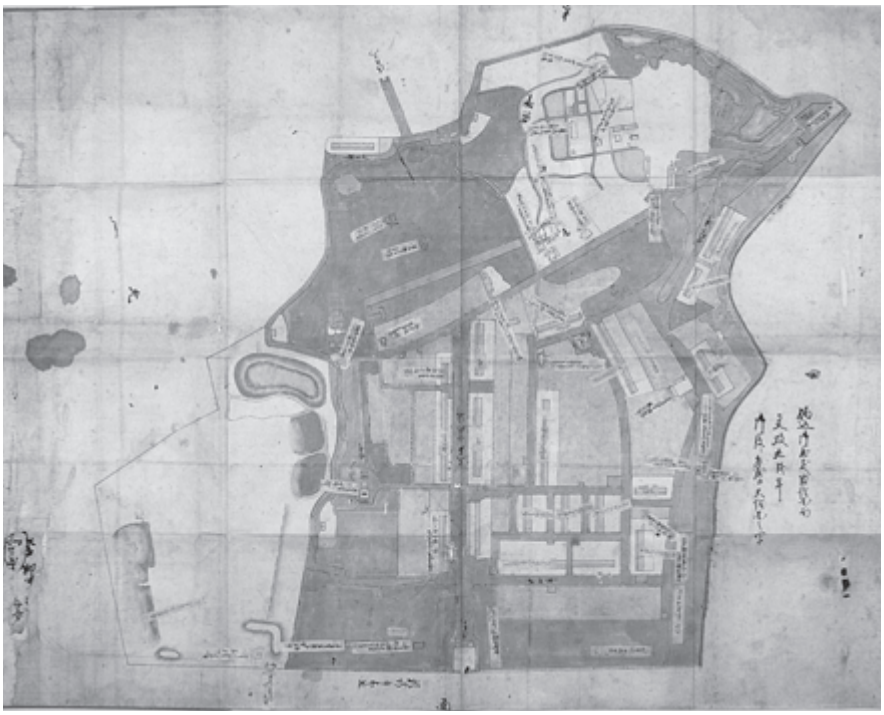
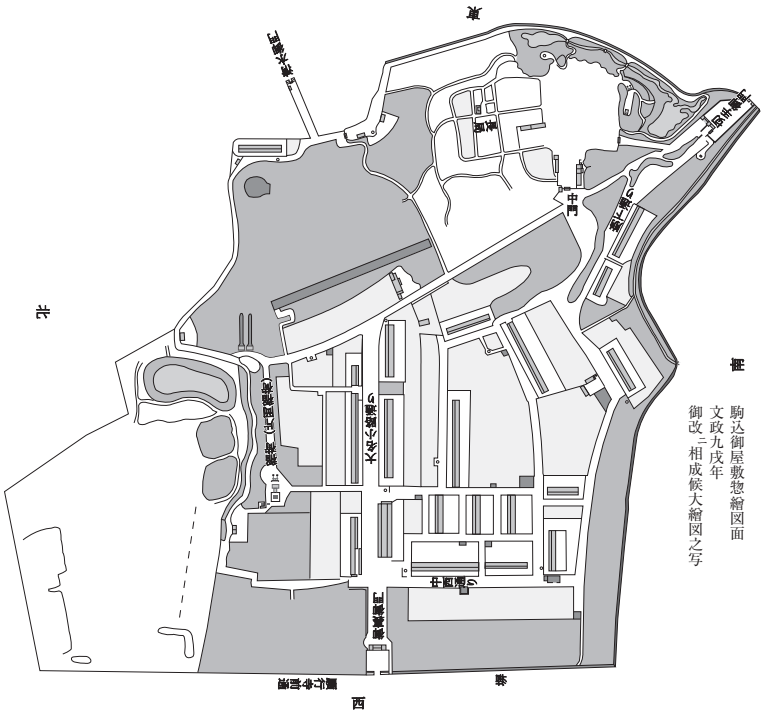


図２　『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』トレース（　）筆者加筆


駒込御屋敷惣繪図面
文政九戊年
御改ニ相成候大繪図之写
東
西
南
北
中門
表門
表上屋敷
表水戸屋敷
裏水戸屋敷
裏上屋敷
裏表水戸屋敷
裏表水戸屋敷
裏表水戸

第一章　向ヶ岡弥生町の歴史

一．向ヶ岡弥生町の由来と駒込邸

向ヶ岡弥生町は明治五（一八七二）年に名付けられる。「向ヶ岡」は「忍ヶ岡」（上野の岡）から見て向こうの側の岡を示す。「向ヶ岡」の範囲について、太田蜀山人は『向岡閑話　上巻』(5)の中で「思ふに西の丸の辺より駿河台につゞき、本郷池の端のつゞきて、向ひが岡といひしかもしらず。今も忍ばずの池のむかふ、榊原侯の屋敷の辺をも、向が岡とよぶはこれならんかし。」と記しており「榊原侯の屋敷」（高田藩榊原家）辺りも向ヶ岡と呼ばれていた。

「弥生」は、徳川齊昭が駒込邸に建立した「向岡記」碑の碑文の「文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日」（文政十一年弥生十日）からとられた。一部の地名事典には由来をあいまいにしているものがあるが、東京都公文書館蔵の拓本『向岡記』の裏書には、「右向岡記係水府烈公撰幷書今在向岡彌生町御水戸邸址彌生町名所由起也　東京府記録掛　小宮山（朱印）」と記され、碑文が町名の由来で、駒込邸は向ヶ岡弥生町の範囲であることが明記されている。この拓本は東京府の地理誌編纂総修を務めた小宮山綏介（元水戸藩士　江戸時代は南梁を名乗る）による手拓と考えられ、彼が東京府在職中の明治十（一八七七）年から明治二十一（一八八八）年までの間に手拓されたと考えられる。

水戸藩は元和八（一六二二）年、向ヶ岡（神田台と記載される）に下屋敷を拝領する。元禄六（一六九三）年、下屋敷が中屋敷となり、天保六（一八三五）年、北側に隣接する安志藩下屋敷を相対替により取得、地続きの抱屋敷を買得する（表1）。駒込邸は「駒込邸」、「駒込別荘」などと呼ばれ別荘として使用された他、小石川邸（上屋敷）が被災した際の避難場所であった。明暦の大火（明暦三（一六五七）

表1　水戸藩江戸藩邸の変遷

年代	江戸水戸藩邸（上屋敷・中屋敷・下屋敷）
元和六（一六一六）年閏十二月	水戸藩江戸藩邸、江戸城内の松原小路に完成(1)。
元和八（一六二二）年八月	本郷駒込（神田台）に下屋敷を拝領。
寛永元（一六二四）年十一月	浅草谷島（矢島）に蔵屋敷を拝領。浜屋敷、浜町屋敷などと呼ばれる別邸となり、中屋敷なる。
寛永六（一六二九）年閏二月	小石川に屋敷を拝領。
寛永六（一六二九）年九月	藩邸が竣工し初代藩主頼房が小石川に居を移す。
明暦三（一六五七）年一月	江戸の大火で江戸城内の屋敷が類焼。幕府はその地を取り上げるかわりに、小石川の屋敷を拡張して与え、上屋敷（はじめ七万六六九九坪、のち九万九七五三坪）とした。
元禄六（一六九三）年十月	浜屋敷を本所小梅屋敷と交換。駒込を中屋敷（五万四二〇〇坪）、小梅屋敷を下屋敷（一万八五〇〇坪）とした。
宝永三（一七〇六）年十月	宝永三（一七〇六）年十月、駒込邸の東側の一部が上地となる。
天保六（一八三五）年九月	北隣りの安志藩小笠原家の下屋敷を相対替により取得し、合わせてその地続きの抱屋敷を買得する(2・3)。
明治二（一八六九）年	明治政府駒込邸を公収。

1．茨城県史編さん近世史第一部会一九七〇『水戸紀年一　威公』『茨城県史料　近世政治編Ⅰ』茨城県発行 p.441
2．国会図書館蔵「安政三辰年十月調　下谷　谷中本村　東叡山　下駒込村　根津　新堀村　谷中　金杉村　一圓之繪圖　弐拾壱元」　安政三（一八五六）『御府内場末往還其外沿革圖書』21元上（旧幕引継書）
3．安政三年（一八五六）『諸向地面取調書』第一巻　第一冊　御三家・國持・柳之間・交代寄合　御三家　水戸中納言殿　史籍研究會一九八二『諸向地面取調書（一）』内閣文庫所蔵史籍叢刊第十四巻　汲古書院 p.9
この他、鈴木暎一二〇〇六『徳川光圀』人物叢書新装版　日本歴史学会編集　吉川弘文館発行、文京区遺跡調査会二〇〇〇「第Ⅳ章　水戸藩関係文献調査の成果」『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点　文京区埋蔵文化財発掘調査報告書第二十集』等を引用した。

年）では、小石川邸が新築されるまで藩邸の機能が駒込邸に移されている。また、明暦の大火後、徳川光圀が駒込邸にあった茶屋に彰考館の前身の史館を置き、編纂事業を開始する。この他邸内の施設について『茨城県史料』等に殿舎（表御殿・裏御殿）、長屋と役所の建物に関する記述がある。

二．明治時代以降の駒込邸

駒込邸は明治二（一八六九）年、明治政府に公収される。東京府は空き地となった武家地を耕作地化し輸出品の茶、絹糸を生産し、外貨を稼ぐことを目的とした茶桑政策を実施した。駒込邸跡地では明治六（一八三五）年陸軍省用地、文部省用地等になるまで水戸藩士による茶、桑の栽培が行われた(6)。その後、向ヶ岡弥生町は、警視局（庁）用地（射的場、梅毒検査所）、東京府用地（東京府癲狂院、東京府避病院）、第一高等学校などを経て、現在、東京大学と住宅地となっている。

明治九（一八七六）年、東京府用地と文部省用地、現在の浅野地区と北側住宅地、西側住宅地が警視局（庁）用地となり、射的場が建設される。射的場は不平士族の鎮圧を主目的に建設された施設で、明治七（一八七四）年、上野に建設された射的場の代替施設として計画され明治九（一八七六）年五月に建設予定地が警視局用地となり建設を開始する。明治十（一八七七）年一月十五日会場式が行われ「狙撃演習」が開始される。西南戦争では、九州等に派遣された巡査、九、五〇〇名の中には、府内の第一大区から第六大区の演習場で「銃術演習」と上野と向ヶ岡弥生町で「狙撃演習」を行った巡査が含まれていたと考えられる。浅野地区　61工学部武田先端知ビル地点（数字は登録番号）では射場の出入口を検出し、射場の埋土から小銃の弾丸が出土している。西南戦争終結後の明治十一（一八七八）年二月十七～十九日（二月十七日は西郷隆盛が熊本に向けて進軍を開始した日）、警察関係者五七〇余名が参加して射的会が行われる(7)。この射的会以降、射的場は軍事演習場から、射的会会場としても使用されるようになる。明治十五（一八八二）年七月三日、明治天皇が出席して天覧射的会が行われる。天覧射的会は、同年に四回、明治十六（一八八三）年に二回、明治十七（一八八四）年に一回行われた（現在までで確認できた回数）。明治十五（一八八二）年、警視庁用地のうち射的場関連施設が宮内省用地となり(8)、射的場は宮内省用地のまま「東京共同射的会社」（現社団法人日本ライフル射撃協会）の射的場となる。「東京共同射的会社」は西郷従道、川村純義、村田経芳ら陸軍、海軍、警視庁、宮内省等の関係者が発起人となって設立された会社で(9)、射的場が「官民有志者の共同射的會社新に成り、諸事整備」されたことから、十一月十七日に天覧射的会が行われる。射的会には、明治天皇、皇族関係者、ロシア代理公使、イタリア公使が招かれ、射的場東側の警視庁用地に建設された「弥生亭」（弥生舎）で射的会の表彰式と酒宴が行われる。庭園に電気燈が灯され不忍池に烟火が掲げられ、参加者は不忍池の景観と庭園の景観を楽しんだ（史料1）。同年七月三日の天覧射的会で明治天皇は表彰式と酒宴が終了した夜、皇居

に戻っていることから[10]、「弥生亭」は七月三日の射的会までには建設されていたと考えられる。「弥生亭」については「向ヶ岡の彌生館は紅葉館にもひってきすべき宏壮の建築」「目下鐵管を伏せて噴き井戸を設けられるゝ最中」[11]とあり「弥生亭」は後に芝公園に建設された紅葉館（後の弥生館）に匹敵する「宏壮の建築」で、庭園の整備が行われている。明治二十（一八八七）年に警視庁用地は警視総監三島通庸と浅野家の間で話がまとまり、浅野家に譲り渡される[12]。現在、言問通りで分断されている浅野地区と北側の宅地が警視庁用地で、浅野地区北側は宅地化し、浅野地区理学部3号館とタンデム加速器研究施設の間に浅野侯爵邸、低温センターから情報基盤センターの辺りに浅野侯爵邸別邸が建設された。浅野家敷地は昭和十六～十九（一九四一～一九四三）年にかけて東京大学の敷地となる。浅野地区の名称は浅野家敷地であったことを由来とする。

一方、弥生地区は東京府用地で避病院（コレラ病院）、東京府癲狂院（精神病院、現都立松沢病院）が建設されている。明治十四（一八八一）年に上野から向ヶ岡弥生町の東京府用地に移転した東京府癲狂院は、明治十九（一八八六）年、射的場の騒音被害と被弾被害のため小石川駕籠町に移転する[13]。同年、東京府用地に第一高等中学校建設計画が出され、明治二十二（一八八九）年竣工する。

史料1

「（明治十五年十一月）十七日　官民有志者の共同射的會社新に成り、諸事整備したるを以て是の日午前九時三十分御出門、向ヶ岡射的場に行幸あらせられ、同社社員たる軍人・警視その他の競技を覧たまふ、嘉彰親王・貞愛親王・能久親王及び露西亜國代理公使ローマン・ローゼン、伊太利國代理公使エ・マルタン・ランチャーレス等を召し、陪覧せしたまふ、畢りて弥生亭に成らせられ、高點者に賞品を賜ひ、陪覧諸員に酒肴を賜ふ、午後七時二十分還幸あらせらる、是の忍池畔に於て烟火を掲げ、又海軍省は彌生亭庭内に電氣燈を點じて、宸興を添ふ、（後略）」（宮内庁一九七一『明治天皇紀　第五』吉川弘文館 p.817）

第二章　駒込邸の景観

一．殿舎（表御殿・裏御殿）の位置と景観

江戸時代の遺跡を研究対象とする近世考古学において調査地点が大名屋敷の「殿舎（表御殿・裏御殿）」区域であったか「長屋・役所」区域であったかは遺跡を評価する上で重要である。そこで殿舎（表御殿・裏御殿）の景観について記された史料から実際の位置を推定する。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に表御殿の記載はないが、裏御殿を示す「長局」の記述がある。史料には忍ヶ岡と不忍池の景観に関する記述があることから、『明治十六年陸軍参謀本部測量原図』[14]の等高線から断面図を作成し、不忍池の景観を検討すると[15]、射場の防護壁によって不忍池が見えない範囲があるが、不忍池は、概ね現在の弥生地区、浅野地区どちらからも眺望可能で、東側の台地の突端（現在の浅野地区）に近づくと不忍池はより大きく見える。不忍池の景観を最大限に得るためには、藩邸の東側、より不忍池に近い場所

に殿舎（表御殿）を建設すれば良い。そこで景観に関する記述を

①位置
②高さ
③方向
④対象物（景色・構造物・建物など）

に分類、検討し、史料の位置情報化を行い殿舎（表御殿）の位置を推定する。

（史料2）は、光圀が東叡山麓（忍ヶ岡）に植えた桃を、殿舎（表御殿）から眺めた史料で、年代は邸内が整備された明暦の大火後の記録と考えられる。①は「駒込の御別荘」。②は「見渡し」からある程度高さのある場所。③は忍ヶ岡と駒込邸との位置関係から表御殿から東側を眺めている。④は「しのはすの池」（不忍池）と「東叡山の麓」（忍ヶ岡）に植樹した「桃」が対象である。以上から（史料2）には、①～④の情報すべてが含まれる。この史料のように桃の花の眺めを楽しんだ例に、芸州浅野家の庭園である広島市縮景園例がある。縮景園は中国の西湖を縮景した庭園で、「蘇堤」の「跨虹橋」「映波橋」が再現されている。「縮景園八景図」の「長堤桃花」は、縮景園に対峙する京橋川対岸の大須町河岸に桃を植樹し[16]「西湖十景」の一つ「蘇堤春暁」[17]を再現したものである。縮景園の「長堤桃花」から、光圀が願い出た桃の植樹は、不忍池を西湖に見立て「蘇堤春暁」の景観を再現したものと考えられる。光圀は、小石川後楽園に朱舜水の意見を用い、中国の風景を取り入れた西湖堤を再現した他、水戸の千波湖の堤に柳を植樹し「柳か堤」と名付け、千波湖を西湖に見立て「蘇堤春暁」を再現している（史料3）。

（史料4）は、齊昭が藩主に就任する前後の史料で、文政十（一八二七）年十一月二十四日夜、小石川邸の表坊主部屋から起きた火災によって本殿守が焼失し、齊昭が駒込邸に避難している。記された景観は年代から『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の邸内の状況を示すと考えられる。①は避難した「駒込の別邸」である。②ははっきり明記されていないが（史料2）のようにある程度高さのある場所。③は忍ヶ岡と駒込邸との位置関係から東を眺めている。④は「上野東叡山」（忍ヶ岡）、「邸を環て老杉長松圍み都下紅塵中自ら仙境をなせり」は庭園の景観である。

光圀の（史料2）、齊昭の（史料4）はどちらも、表御殿から「忍ヶ岡」を眺望した点で一致、両時代で殿舎の位置は変わらなかったと考えられる。また、光圀は不忍池を西湖に見立てており、不忍池の借景は、駒込邸の設計にとって重要な要素であったと考えられる。

史料2

「武州駒込の御別荘よりしのはすの池を見渡し風色面白かりけるに、それより御覧のため、其趣を御門主へ御願ひありて、東叡山の麓に桃多く御植させ御遠望なされ候」（『桃源遺事』千葉新治編一九〇九『義公叢書』国会図書館蔵 p.197）

史料3

「水戸城邊の千波湖の池は湖水ともいふへきほとの池なり、其中に

堤あり長十八丁此堤を行かふ人多し、されば炎天に木陰なく行人の暑にくるしまん事思召、又其景色のために西湖の蘇堤になぞらへ、兩岸に楊柳をひしと御植させ、柳か堤と御名付候、それよりして夏日のあつき日も柳陰つらなり影涼しく、堤にいこふ者おほく、四時の景色又ことなり（後略）」（『桃源遺事』千葉新治編一九〇九『義公叢書』国会図書館蔵 pp.198-199）

史料4

「文政十年十一月二十四日夜小石川邸殿舎火を失して悉く灰燼となれり（中略）公は生母外山氏と駒込の別邸に移りぬ抑も此邸は向岡とて上野東叡山と相對峙邸を環て老杉長松園み都下紅塵中自ら仙境をなせり公此間にありて日夕心を和漢古今の書に潛め大に得る所ありしとぞ此頃の作なりし警語及び國文を左に擧ぐ」（吉川弘文館一九七〇「巻一第一章　烈公の少壮時代」『水戸藩史料別記上』明治三十年五月刊の再版 p.18,pp.19-20）

二．表門の位置

表門の位置は、殿舎の位置を検討する上で重要である。一般に絵図には、表門の向きを頭にして屋敷名・寺社名を記すとされる。『寛永江戸全図』[18]では、駒込邸を示す「水戸中納言殿　下屋敷」の記述は現在の本郷通り側が頭になっている。後の『江戸切絵図』でも駒込邸を示す「水戸殿」も同じ向きである。

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』には三つの門が描かれている。現在の現本郷通り側の門に「御裏御門」、藩邸の南側の門に「切手御門」、東側の門に「清水御門」と記されている。屋敷名の向きでは藩邸西側の門が表門ということになるが表門とされる門には「御裏御門」と記されている。「切手御門」の東側に隣接する東淵寺は駒込邸の南端に隣接する寺で『御府内寺社備考』[19]に絵図が掲載されている。絵図によれば「切手御門」に至る道に「水戸殿表門通り」と記されている。以上から、表門は藩邸の南側にある門で、絵図の記述は配置上の都合などで本来の形式が変更されたと考えられる。以上、「切手御門」の位置から殿舎（表御殿・裏御殿）は現在の浅野地区にあったと考えるのが妥当である。

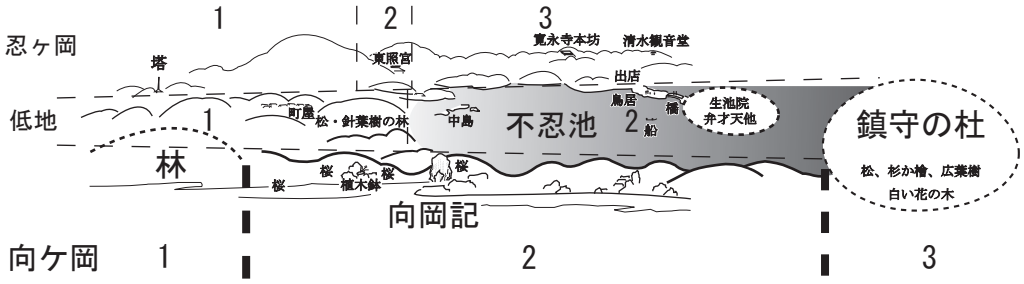
三．㈶水府明徳会彰考館徳川博物館蔵『向岡記』の景観と『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の施設

『向岡記』は庭園図と碑文から成る。「向岡記」碑が置かれた殿舎（表御殿）の庭園と忍ヶ岡、不忍池の景観が描かれ、「信義筆（朱印）」銘が記されている。庭園には「向岡記」碑と桜が描かれ、碑は「向岡記」碑の形状、割れを正確に写し碑文も表現されている。

記されている碑文の書体と内容は、実際に碑に刻まれたものと同じであることから齊昭の書と考えられる。以上から『向岡記』は碑の建立後に齊昭が「信義」なる絵師に表御殿の庭園図を描かせ、齊昭自ら「向岡記」を記したと考えられる。

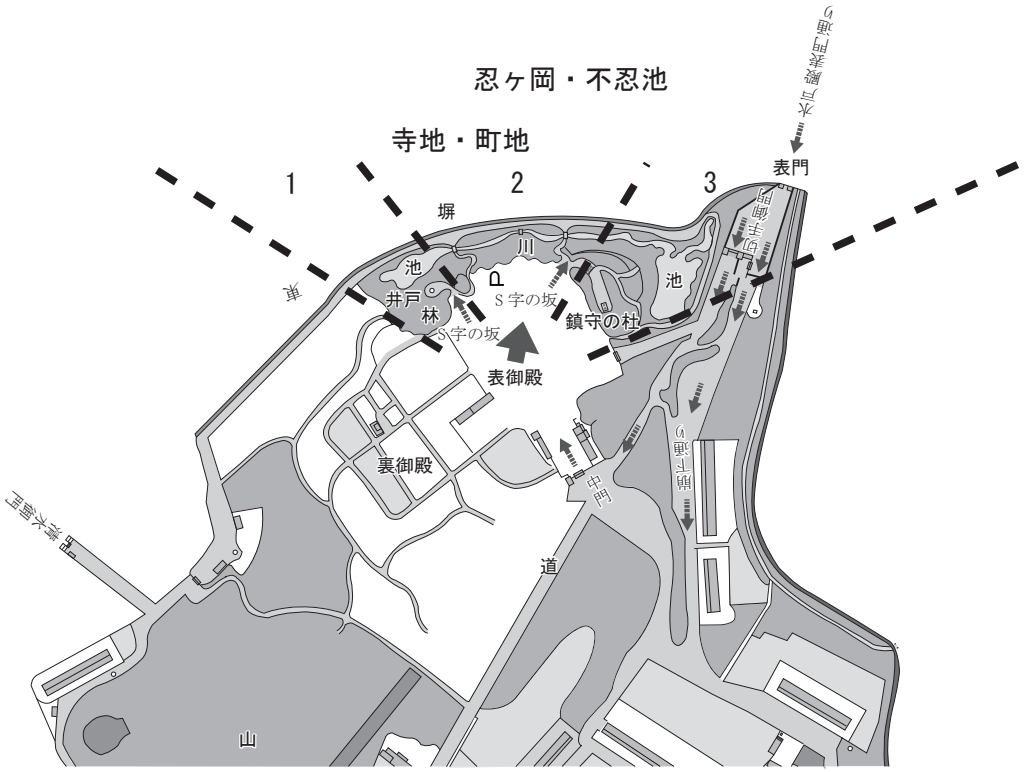
『向岡記』に描かれた景観を「忍ヶ岡」「低地」「向ヶ岡」の三つに分割し、描かれた要素を「位置」「地形」「建造物」「植生」に分類、

図３　『向岡記』に描かれた忍ヶ岡、不忍池、向ヶ岡の景観



『向岡記』㈶水府明徳会彰考館徳川博物館蔵より作成

図４　駒込邸の庭園と「向岡記」碑の推定位置、駒込邸正門から殿舎、回遊式庭園までの順路



『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（筆者蔵）より作成

検討する（図3、表2）。

表2　「向岡記」の景観分析　忍ヶ岡、低地、向ヶ岡の地形・建造物等・植生

忍ヶ岡			
位置	1	2	3
地形	山	谷	山
建造物等	塔		清水観音堂、寛永寺本坊、東照宮
植生	桜、松、広葉樹		

低地		
位置	1	2
地形	低地	不忍池
建造物等	町屋	中島、弁天島と道（道・橋・出店・生池院・弁財天他）、対岸の出店、船、人
植生	松、針葉樹、広葉樹	

向ヶ岡（駒込邸）				文政9年駒込邸絵図	現在
位置	1	2	3		
地形	林	築山	森（鎮守の杜）		
建造物等		植木鉢、庭石、「向岡記」碑		井戸	「向岡記」碑旧設置場所（工学部10号館西）に「向岡記」の碑の周りに描かれている石の形状に似た3個の石が残る。
植生	広葉樹	桜（枝垂れ桜他）、松（低木）、広葉樹（低木）、芝生	松、杉か檜、広葉樹、白い花の木	曲線の連続（緑色に彩色）、S字の道	
				神社	

忍ヶ岡

現在の上野の岡の地形を検討すると、「東照宮」北で谷が確認できる。『向岡記』には二つの山と谷が描かれ、現在の地形と一致する。山には松、針葉樹、広葉樹の中に、白色もしくは桜色で桜が描かれている。1の山に「塔」、2・3の山には三つの建物が描かれている。現在の地形と建物の位置関係を検討すると、1の「塔」はどこの塔であるか不明、3の北側の建物は方形で赤色に彩色されていることから「寛永寺本坊」、山の端にある南側の建物は赤く彩色された柱と梁が確認できることから「清水観音堂」、「東照宮」は谷の南側に位置することから、2に位置するように見えるが実際は3に位置する。建造物の位置関係や山の高さは誇張されているが、位置関係は間違っていない。

低地

1には「町屋」、松、針葉樹の森、広葉樹が描かれている。2の「不忍池」の北側の範囲は明確でない。不忍池に中島と弁天島が描かれている。弁天島には生池院、弁財天等の建物が描かれている。弁天島に繋がる道には鳥居があり、橋が架けられている。道と対岸には出店と弁天島を訪れた人々、舟遊びの様子も描かれており、不忍池の岸辺と弁天島の活気が描かれている。

向ヶ岡

駒込邸の庭園は1～3の景観に分けられる。

1．葉と幹が詳細に描かれた広葉樹が描かれている。低地の町屋の景観（2-1）の一部が遮られている。

2．『向岡記』には8つの「築山」が配置されている。緑色に彩色

されていることから芝が張られていたと考えられる。「築山」とその手前には、松と広葉樹の低木が植えられ庭石が配置されている。「向岡記」碑の周辺には3つの石が描かれている。「向岡記」碑が二〇〇七年まで設置されていた工学部10号館西に3つの石が残されている。石は「向岡記」と同じ形状である。

碑の周りには4本の桜が描かれている。花びら、葉、幹、枝が詳細に描かれており、1本は枝垂れ桜で品種が描き分けられている。この他、斜めに置かれた植木鉢が描かれている。

3．1、2と異なり様々な木が描かれた森で、不忍池の弁天島南側の景観を遮っている。大振りの松、杉もしくは檜と考えられる針葉樹、白い花の木などの広葉樹が確認できる。

四．『向岡記』の景観と『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』には文政九（一八二六）年と記載されており、『向岡記』の描かれた頃の邸内を示していると考えられる。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の台地の突端は『向岡記』と同じ3つの区域に分けることができる。台地の突端の表現と施設は北から、

1．緑色で彩色された中に「井戸」
2．曲線の連続、内側が緑色に彩色される
3．緑色で彩色された中に「神社」

がある（図4）。1と2、2と3は灰色で彩色された「S字の道」で分けられている。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』と『向岡記』から1～3を分析すると、

1．井戸は見えない。景観の目隠しになる築山に木々を植えている。忍ヶ岡と低地の町屋が見えることから、林は完全に景観を遮るまでの高さはない。

2．この部分は、忍ヶ岡と不忍池が最もよく見える部分で、この場所に「向岡記」碑が建立されている。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の曲線の山の数は6、1と3の道の脇の曲線を加えると山の数は8となり、数え方によっては両史料の数が一致することから、向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の曲線は「築山」を表現したもと考えられる。「向岡記」碑は築山の手前に建立され、周りに桜が植えられている。この他、「向岡記」には傾いた植木鉢が描かれている。景観をきれいに整えるという意図があれば、まっすぐに直のだろう。この植木鉢からも景観を正確に描いたと考えられる。

3．「向岡記」では神社は見えないことから、景観の目隠しになる築山の中に神社がある。木々の樹齢はその大きさから長く樹種は多種多様であることから、いわゆる「鎮守の杜」と考えられる。「鎮守の杜」によって忍ヶ岡と不忍池は見えず、東側の景観を完全に遮っている。

1～3の緑色の彩色が「築山」だとすると1と2、2と3の間に在る「S字の道」を下る際、進行方向にある「築山」が隣接する町屋と寺地の景観を遮っていたと考えられる。

五．齊昭と光圀の景観に関する記述と殿舎の位置

齊昭は文政十（一八二七）年、駒込邸の庭園と景観について「此邸は向岡とて上野東叡山と相對峙邸を環て老杉長松圍み都下紅塵中自ら仙境をなせり」（史料4）と述べている。表御殿から忍ヶ岡の「上野東叡山」が見え、庭園には「老杉長松」がある。『向岡記』の「鎮守の杜」は、ここで述べられている「老杉長松」の景観と考えられる。以上から『向岡記』、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』と（史料3）の年代と記述は矛盾しない。齊昭は「向岡記」碑で、咲き満ちた桜の木のもと、「名尓進於不、春爾向賀、岡難連婆、余尓多具肥奈岐、華乃迦計哉」と詠んでいる（史料5）ことから、『向岡記』に描かれている景観は、そのまま『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』、（史料3・4）、「向岡記」碑の碑文そのものであった。

小石川後楽園は初代頼房以降、歴代藩主が手を加えたことが知られるが、駒込邸も同様に歴代藩主によって手が加えられ、齊昭に引き継がれたと考えられる。齊昭は国元から持ち込んだ寒水石に、源義家の伝説と家康以降の開発によって発展し、京阪に引けを取らない景勝地ができた江戸の現在、向ヶ岡の歴史と景観を碑に刻み、景観を『向岡記』に残した。

史料5　「向岡記」碑文の解読と解釈（横山淳一作成、塩原都・飯村博校正）

「（前略）今茲文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日、咲満他留佐九良賀本迩志亭可丘波加伎通孔類二許曽。佐屢波、弓矢藤類身毛、猛吉乎乃美本利寸流目能加波登思不尓、大和宇當八武夫能心乎
也波良具留奈流遠、其賀酒別江斯羅称婆、娜迦奈加以飛出門閉鬼固登能波毛阿良称杼、加々流處遠
只耳見過佐牟門、阿陀樂斯氣禮伐、夜左斯可禮杼迦九那無。
名尓進於不、春爾向賀、岡難連婆、余尓多具肥奈岐、華乃迦計哉。」

「今ここに、文政十一年の三月十日、咲き満ちた桜の木のもとに、このように書きつゃる次第である。というのは、武士の身であっても、勇猛なだゃを望むものであるまい、と思うと同時に、和歌は武人の心を和らげると聞いているが、その和歌をつくる方策を知り得ないので、容易には、言い出すことばも見つからないゃれども、このような所を、ただ見過してしまうのも惜しいので、恥ずかしいゃれども、このように詠んだ。

名にし負ふ　春に向岡（むかひがをか）なれば　世に類（たぐひ）なき　花の陰かな

その名にふさわしく　春に向かう、その向かいが岡だゃあつて他に比べるものがないほどすばらしい花の陰であることよ。」

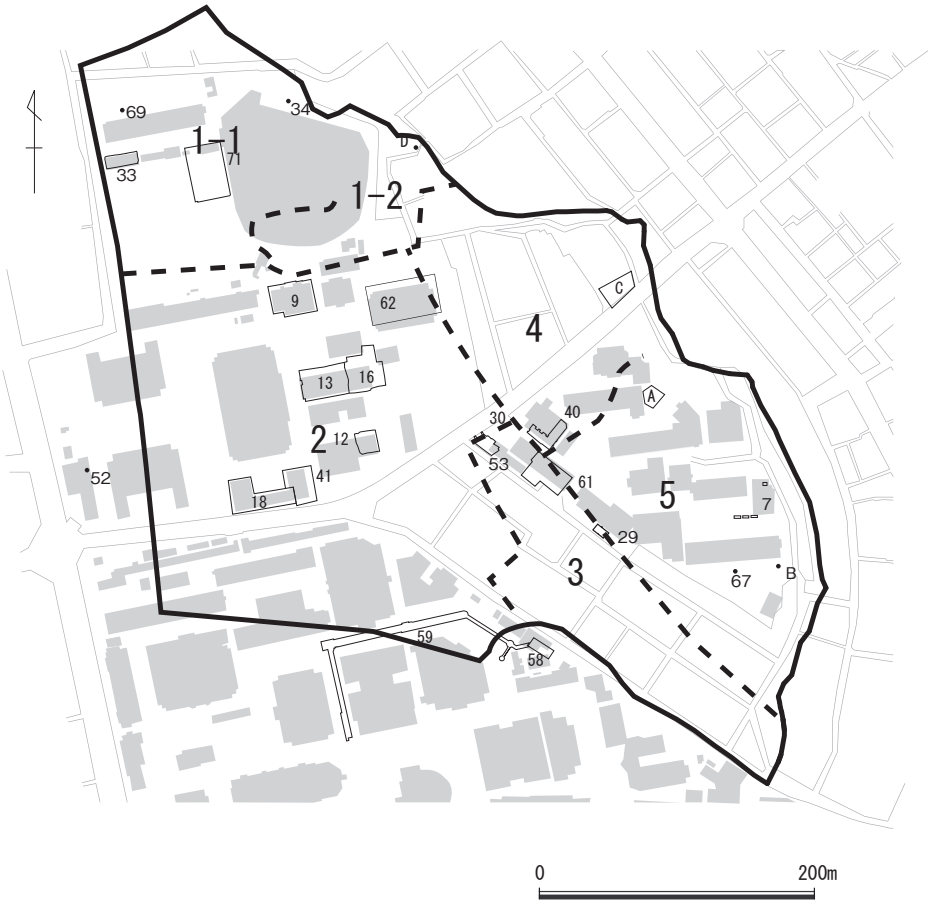
第三章　駒込邸の遺跡と発掘調査で確認された造成と造園

一．旧地形と駒込邸の遺跡

向ヶ岡弥生町の旧地形は、『明治十六年陸軍参謀本部測量元図』、発掘調査の結果から、西側台地（1―1、1―2支谷、2）、支谷（3）、東側台地（4、5）、文政九（一九二六）年以降は『向陵彌生町舊水

戸邸繪図面』から、西側台地（1安志藩下屋敷・抱屋敷、2長屋・役所、3殿舎西側敷地、4殿舎北側敷地、5殿舎西側敷地に土地利用されている（図5・6）。

図5　現在の文京区弥生と旧地形、駒込邸の区画



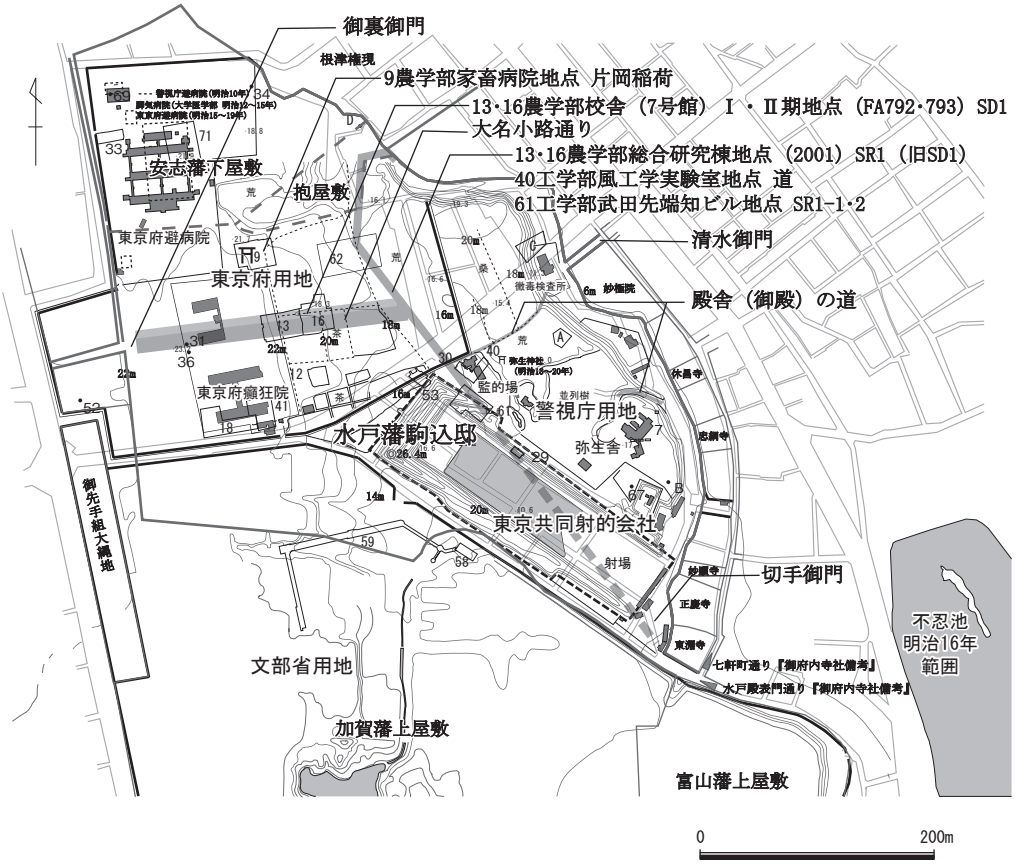
旧地形と駒込邸内の区域

旧　地　形	『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』
西側台地（1-1・1-2 支谷・2）	安志藩下屋敷・抱屋敷（1）
	長屋・役所（2）
支谷（3）	殿舎の西側敷地（3）
東側台地（4、5）	殿舎の北側敷地（4）
	殿舎（5）

A 弥生二丁目遺跡（文学部考古学研究室・理学部人類学教室）、B 理学部３号館南遺跡（文学部考古学研究室・理学部人類学教室）、C 弥生町遺跡一次調査（文京区教育委員会）、D 弥生町遺跡二次調査（文京区教育委員会）、７タンデム棟、９農学部家畜病院、12 農学部図書館、13・16 農学部７号館地 A 棟Ⅰ・Ⅱ期、18 総合研究棟、29 情報基盤センター変電室１、30 工学部風工学実験室支障ケーブル、33 地震研テレメタリング地震観測施設、34 野球グランド、40 工学部風工学実験室、41 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、52 農学部木質ホール、53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室、58 共同溝、61 工学部武田先端知ビル、62 農学部総合研究棟、67 地震研究所総合研究棟、69 地震研仮設建物、71 地震研究所総合研究棟

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』より作成

図６　文政９（1826）年の駒込邸と明治 16（1883）年の向ヶ岡弥生町、駒込邸関連遺跡



A 弥生二丁目遺跡（文学部考古学研究室・理学部人類学教室）、B 理学部３号館南遺跡（文学部考古学研究室・理学部人類学教室）、C 弥生町遺跡一次調査（文京区教育委員会）、D 弥生町遺跡二次調査（文京区教育委員会）、７タンデム棟、９農学部家畜病院、12 農学部図書館、13･16 農学部７号館地 A 棟Ⅰ・Ⅱ期、18 総合研究棟、29 情報基盤センター変電室１、30 工学部風工学実験室支障ケーブル、33 地震研テレメタリング地震観測施設、34 野球グランド、40 工学部風工学実験室、41 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、52 農学部木質ホール、53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室、58 共同溝、61 工学部武田先端知ビル、62 農学部総合研究棟、67 地震研究所総合研究棟、69 地震研仮設建物、71 地震研究所総合研究棟

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』、国会図書館蔵　安政三（1856）『御府内場末往還其外沿革圖書　弐拾壱元上』（旧幕引継書）、宮崎勝美 2000「江戸本郷の加賀屋敷（図２　現在の本郷キャンパスと藩邸の位置　p.31）」西秋良宏編『東京大学コレクションＸ　加賀殿再訪　東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館発行、（財）宮本記念財団、立教大学学校・社会教育講座、博物館学研究室 1983『旧下谷区池之端七軒町の調査報告書（財）宮本記念財団調査報告Ⅱ（物質文化研究２）―立教大学博物館学研究室調査報告 23―』、建設省国土地理院所蔵、（財）日本地図センター複製 1984「明治 16 年第一測期第二測図　参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」他より作成

西側台地の2長屋・役所と東側台地の4殿舎北側敷地・5殿舎は『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』によれば、邸内は灰色に彩色された道で東西に区画されている。62農学部総合研究棟、40工学部風工学実験室、61工学部武田先端知ビルの発掘調査でこの道を検出している。農学部総合研究棟では幅十m、深さ四mの切り通し状であった。農学部2号館前辺りにあった「御裏御門」から東にのびる「大名小路通り」はこの道に接続する。「大名小路通り」の北側に沿って埋設された上水施設が3・16農学部校舎7号館地A棟Ⅰ・Ⅱ期で検出している。藩邸北側に位置する9農学部家畜病院は、片岡稲荷の敷地にあたり、縁起物として供えられた狐や大黒などの土製の縁起物と稲荷で使用された灯明皿と受け皿が大量に出土している[20]。

二．7タンデム棟で確認された造成と景観への効果（図8・9）

7タンデム棟は、殿舎（表御殿・裏御殿）があった5区域（図5）に位置する、タンデム棟の試掘調査[21]では、江戸時代の削平と盛土が確認されている。第二トレンチの地表面の標高は一六・八m、江戸時代の盛土検出面の標高一五・六m、黒ボク土の検出面の標高一四・九m、弥生時代もしくは古墳時代の住居検出面の標高は一四・四m、ソフトローム層の標高は一三・六mである。一方、A弥生二丁目遺跡で検出した弥生時代の環濠集落と弥生時代以降の遺跡検出面の標高は約一九mである。『明治十六年陸軍参謀本部測量原図』によれば、タンデム棟の東側に一六mの等高線が描かれており、江戸時代の盛土検出面の標高一五・六mに近い。台地の崖側の標高一八m等高線は、A弥生二丁目遺跡の南側で西に曲がっている。本来、標高一八mの等高線は台地に沿っていたと考えられることから、一八mの等高線が西に曲がる部分で段切りが行われたと考えられる。しかし、タンデム棟とA弥生二丁目遺跡の盛土の検出状況は、江戸時代の状況を示していると考えられ（図7）、射的場関連施設や道路が新設された部分等を除けば『明治十六年陸軍参謀本部測量原図』は江戸時代の地形を残している可能性が高い。

タンデム棟周辺が切土される前の標高を仮に一八mと仮定すると、発掘調査の結果から台地上が二m削平されたことになる。削平の効果は景観にどういった影響を及ぼすだろうか。駒込邸の殿舎と不忍池の断面図を作成し、殿舎からの不忍池、忍ヶ岡の景観を以下の条件によって検討する（図8）。

- A弥生二丁目遺跡、タンデム棟の土層断面から、タンデム棟側で江戸時代、切土が行われた。
- 切土前の地表面の標高は復元できないため、断面図上の標高一六mと一八mのポイントを直線で結んだ線上を切土前の地表面と仮定する。
- 視点は地表面から二mの高さとする。
- 『向岡記』に描かれた駒込邸の庭園、不忍池、生池院の位置する弁天島の位置関係は正確である。

『向岡記』では、弁天島の北角（C）と島と岸を結ぶ道に架けら

れた橋（B）が近接している。表御殿はB・Cが近接して見える場所と仮定、駒込邸の断面図上には建物が何も描かれていないが、この場所を表御殿と仮定して、『明治十六年陸軍参謀本部測量原図』の等高線からA～Kの断面図を作成、表2に切土前後の景観をまとめた。

表2　①（I）・②（J）の景観と切土の効果

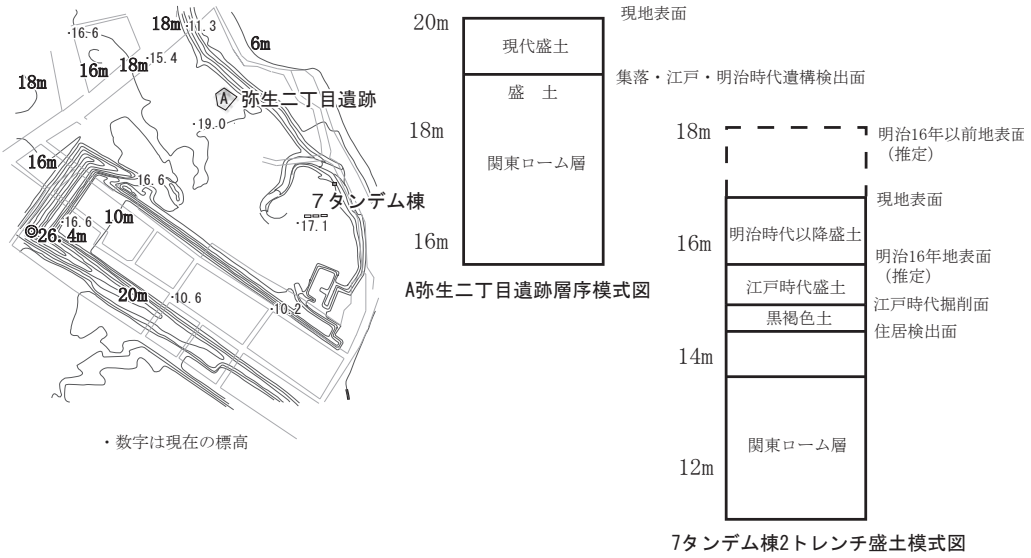
地点		切土前・後	視点	不忍池 見える範囲	不忍池 死角範囲	町屋・寺地 見える範囲	町屋・寺地 死角範囲	忍ヶ岡
①（I）	前	高い	A～D（最大）	F～H	E～F	×	F～G（最大）	○
	後	低い	A～D（最大）	E～H	×	×	E～G	○
②（J）	前	高い	A～D（最大）	D～E	×	×	E～G	○
	後	低い	×A（最小）	A～D	×	×	E～G	○

○見える、×見えない
A～Kの位置関係
・不忍池範囲　A～D（A　不忍池の東端、B　橋、C　生池院の北角、E　不忍池の西端）
・町屋・寺地範囲　E～H（殿舎東（台地下）の庭園含む）
・殿舎範囲　E～K（H　台地の突端、H～K　殿舎の切土範囲）

切土によって「地点①（I）」では、不忍池の見える範囲は最大かつ台地と低地の高低差によって生じた死角によってと町屋・寺地が見えなくなる。「地点②（J）」は切土前は見えていた不忍池が見えなくなる。

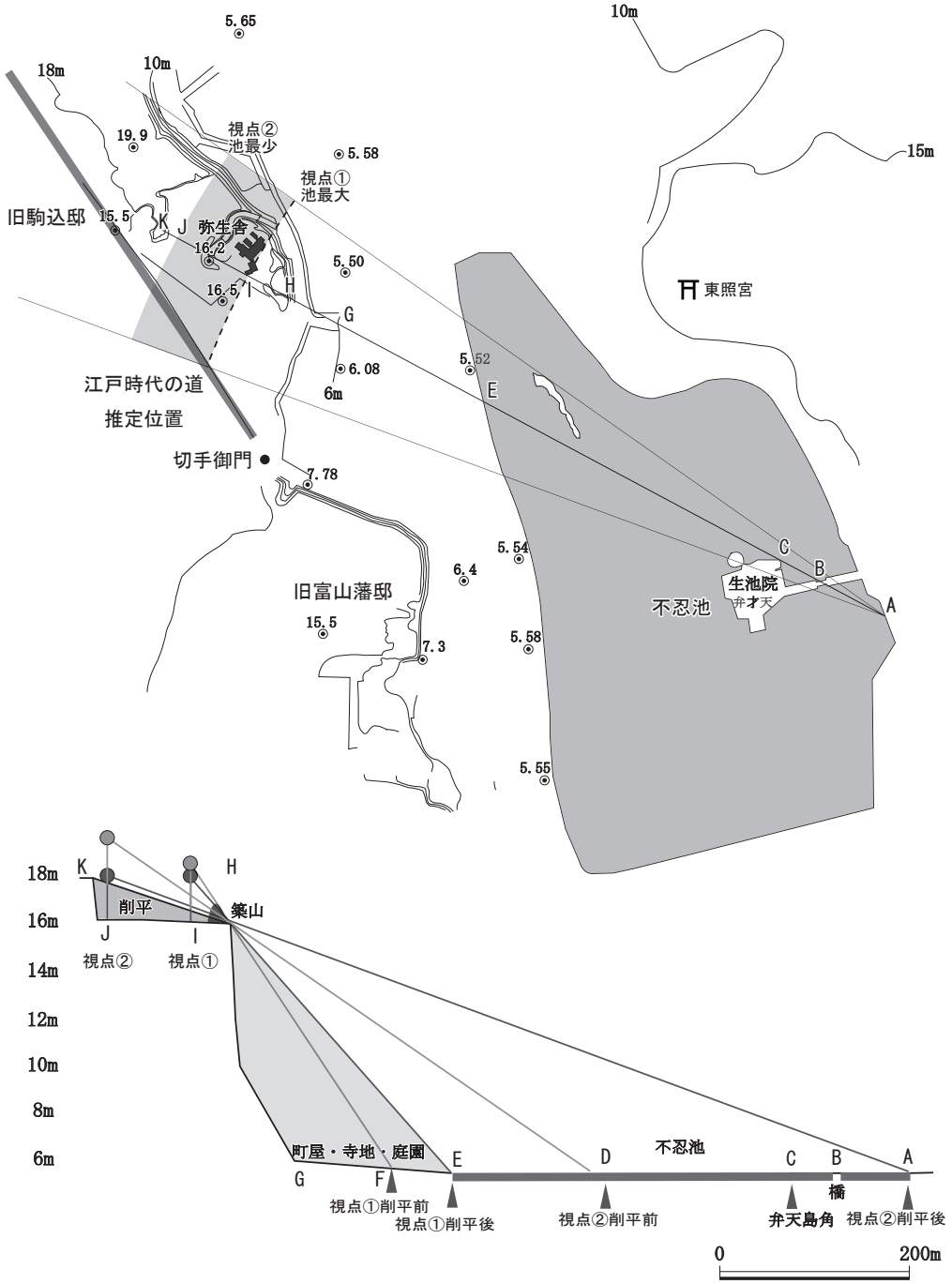
台地の突端には「向岡記」碑が設置されている。「向岡記」碑を見るために台地の突端に近づくと町屋・寺地が見えてしまうが、台地の突端の「築山」によって、町屋・寺地の景観を遮っている。

図7　駒込邸の切土の検討（A弥生二丁目遺跡、7タンデム棟2トレンチの土層断面模式図）



東京大学文学部考古学研究室編 1979『向ヶ丘貝塚―東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査―』、成瀬晃司　調査・作成「新タンデム棟建設予定地点試掘調査報告」（1988）掲載図（『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野Ⅰ』p.294 図7）、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』の等高線より作成

図８　駒込邸内①・②地点の切土による景観の変化



建設省国土地理院所蔵、(財)日本地図センター複製 1984「明治 16 年第一測期第二測図　参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」より作成、不忍池の北側は、監修児玉幸多　編集・制作吉原健一郎他 1994 朝日新聞社発行　地図制作　株式会社武揚堂（P56、57）により訂正、忍ヶ岡の等高線は 1/25,000 東京首都 5339-46 より作成

三．駒込邸の築山と景観

『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』の「切手御門」から「中門」に至る道の西側、不整形で緑色に彩色された部分（3区域　図5）を当初「植込み」と推定、「長屋・役所区域」の道や建物に沿って描かれている点線が塀で、塀と植木によって西側の敷地の景観が遮られていたと考えていたが、緑色に彩色された不整形部分が「築山」であると仮定し景観を推定すると、「切手御門」から「中門」に至る道の西側に「築山」を配置することによって「長屋・役所」区域の景観を遮ることができる。景観は遮られているが、「築山」と「築山」の間に道を配することで往来は可能で、築山の間が「S字の道」となるように設計することによって、「中門」に至る道からは「長屋・役所」の区域が見えなくなる。「切手御門」から「中門」へ至る道西側の緑色の彩色部分は植込みではなく「築山」と推定した。また、邸内に築かれた「築山」は、人の背丈以上なければ景観を遮ることができない。台地の突端と「切手御門」から「中門」に至る道の築山の平面積を考慮すると、「築山」を築くには大量の土が必要である。台地で行われた切土によって大量の掘削土が発生しており、掘削土が造成に使用された可能性が高い。

駒込邸に招かれた大名などの客人が、正門から殿舎（表御殿）に至り、庭園でどのような景観を楽しんだのだろうか。図4に表門から中門、殿舎（表御殿）内の経路を示した。駒込邸に招かれた客人は「切手御門」の東側の門を潜りゆるやかな坂を登る。道は狭く築山が配されることによって周りの景観は遮られている。一方、客人の付き人は「切手御門」西側の門を潜り、築山で分けられた「崩下通り」を通り、別の建物で待機する。

客人が「中門」を潜ると殿舎（表御殿）で門を潜ってすぐは、台地上で行われた切土の効果によって不忍池は見えない。殿舎（表御殿）の建物に入り縁側に進むと庭園を眺めることができ、台地突端、築山の向こうには不忍池が広がり、忍ヶ岡の東照宮、寛永寺本坊、清水観音堂、不忍池周辺の庶民の賑わい、町屋の風景を眺めることができる。庭園には茶の湯のための井戸、鎮守の杜があり、季節の花々と木々、齊昭が建立した「向岡記」碑を鑑賞できた。碑に近づいても台地の突端に配された築山によって藩邸に隣接する町屋と寺地は景観から遮られている。台地下の庭園に行くには「S字の道」を下る。進行方向の視界が「築山」によって遮られ、坂を下ると回遊式庭園が広がる。『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』では、回遊式庭園と町屋・寺地の地境に白い帯が描かれている。白い帯は塀と考えられ、塀によって駒込邸と町屋と寺地が区画され景観が遮られている。

四．風水説と駒込邸の設計

駒込邸は不忍池を臨む位置にある。邸内は南北にのびる道で区画され、殿舎（表御殿・裏御殿）の北側は『明治十六年陸軍参謀本部測量原図』によれば岡状の高まりで、『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』では、墳丘らしき帆立貝型の橙色の彩色がある。また、坪井正五郎の弥生式土器発見当時の絵には岡状の高まりが描かれている[22]。駒込邸の史料には「片岡八郎の墳」「大内山」「願行山」三つの「山」

の記述がある[23]。殿舎の東側、台地の下の低地は回遊式庭園で二つの池が川で接続されている。

進士五十八は『日本の庭園　造園の技とこころ』で造園と風水について「人は背後に山を背負い、前方に平地が広がるような場所で落ちつく。いわゆる背山臨水―風水の地である。そういう場所を「山辺」という。文字通り山の辺。立体的に山が盛り上がり、平面的には湾と岬のように入り組む。その両方が山と平地の間に凹凸の辺、縁、端、境界、エッジといった変化を作る。」と述べている[24]。駒込邸は不忍池に臨んでおり、駒込邸と不忍池の位置関係は「背山臨水」である。「風水説による宅地や都市の立地条件」図（王其亨編『風水理論研究』天津大学出版会（一九九二）より進士作成）には、都市を中心に山（玄武）、池（朱雀）河流（青龍）、大道（白虎）の配置が示されており、駒込邸の殿舎（表御殿・裏御殿）を中心とした「山」「道」「川」の配置がこの図にあてはまる。水戸藩が風水説によって向ヶ岡に屋敷を拝領したとは考えられないが、邸内の「山」と不忍池を生かし、道と川を造成することによって風水説の安定した配置に近づける設計がなされた可能性がある。

五．幕末の駒込邸と「弥生舎」建設に伴う景観の復活

齊昭が活躍した頃の駒込邸は『向岡記』に描かれた華やかな藩邸であったが、小宮山南梁の『南梁年録』には、幕末期の荒れ果てた景観が記されている（史料6）。明治二（一九九〇）年、駒込邸は明治政府に公収され、茶桑政策によって耕作地となる。明治九（一八七六）年に開始された射的場建設によって、殿舎（表御殿）の南西側が抉られ火薬庫等が建設される。現在の本郷地区と浅野地区に囲まれた長方形の住宅地の範囲が射場のために掘削され、殿舎（表御殿）跡に食堂が建設される。殿舎（表御殿・裏御殿）部分は「桑畑」と「笹藪」で御殿（表御殿）からの景観が失われた[25]。しかし、西南戦争後、射的場が軍事演習場から天覧射的会が行われた射的会会場へ移行することによって、殿舎（表御殿）があった区域に迎賓館的な機能をもった「弥生舎」が警視庁によって建設される。天覧射的会では「弥生舎」が表彰式と酒宴の会場となり、明治天皇と参加者は庭園と不忍池の景観を楽しんでいる。「弥生舎」の東側の景観は、不忍池が最大となる位置で、駒込邸の殿舎（表御殿）と「弥生舎」は不忍池の景観を重視して設計された点で共通している。「弥生舎」に明治天皇が行幸し、海外の公使と明治政府の要人が招かれていることから、天覧射的会は大名屋敷で行われた饗応と同様の行事復活と明治政府の政策の一環であり、本当の意味で駒込邸の景観が復活したといえる。「弥生舎」と後の浅野侯爵邸の平面図[26]は一致する部分が多く、浅野家は「弥生舎」の建物を譲り受けたと考えられ、駒込邸の景観は「弥生舎」と共に浅野侯爵邸に引き継がれた。

史料6

「（安政六年九月）五日來ル七日　若年、寄　大久保甚五左衛門御用有之致出府候由

（中略）

一　駒籠御殿向風哭渡御手入れも無之候故蔦蔓抔御？江上り草ハ御庭中生茂り居申候」（茨城県史編集会監修、茨城県歴史館編修、茨城県発行一九八九「南梁年録三十五」『茨城県史料　幕末編Ⅱ』p.255）

まとめ

本論は、『浅野地区Ⅰ』で行った考察に㈶水府明徳会彰考館徳川博物館蔵『向岡記』の解釈を加え、駒込邸内外の景観と造園を検討した[27]。7タンデム棟で確認された切土の効果は、西湖に見て立てられた不忍池の借景を効果的にするためのもので、築山によって景観を遮るなど庭園を楽しむ趣向が凝らされていた。また、邸内の設計は風水説の考えが取り入れられている可能性を指摘した。

駒込邸の景観については、光圀、齊昭の史料、『向岡記』、「向岡記」碑から、邸内の華やかな景観をうかがい知ることができるが、幕末期には修繕が行われないまま荒れ果てた景観が記されている。慶応四（一八六八）年五月十五日の上野戦争では、向ヶ岡の官軍と忍ヶ岡の彰義隊軍が不忍池を挟んで対峙、台地の突端に位置する駒込邸、富山藩邸、高田藩邸は、忍ヶ岡の景観から官軍の砲兵部隊が配置され攻撃拠点となった[28]。明治時代、駒込邸の公収と射的場の建設によって庭園と景観は失われるが、西南戦争終結後、迎賓館として使用された警視庁の「弥生舎」が建設されることによって庭園と景観が復活、駒込邸の景観は浅野侯爵邸に引き継がれる。

浅野地区では、B理学部3号館南で旧石器時代の遺物、A弥生二丁目遺跡で弥生時代の環濠集落、61工学部武田先端知ビルでは弥生時代の方形周溝墓が調査された[29]。この他の遺跡では縄文草創期の土器、中世の板碑片、弥生地区では奈良・平安時代の土器などが確認され、旧石器時代から現在までこの地が生活の拠点となっていたことが明らかになっている。台地から眺めることができる不忍池は縄文海進と埋め立てによって入江から池へ縮小、明治時代、埋め立ての危機を乗り越え現在に至る。旧石器人、縄文人、弥生人、歴代水戸藩主、明治天皇、浅野家の楽しんだ忍ヶ岡、不忍池の景観は歴史の中で継承されてきたが、戦後の不忍池周辺の開発と東京大学の研究棟建設によって一瞬にして消滅、遺跡も破壊された。徳川齊昭が景観の素晴らしさを記した「向岡記」碑は構内の研究棟建設の度に移動、碑の前はごみ置き場になり忘れ去られ、碑文は酸性雨によって消滅する寸前であった。しかし、東京大学が創立百三十周年「知のプロムナード」の学内整備に伴い保存修復を施し、二〇〇八年八月八日、浅野地区情報基盤センターに展示、自由に見学できるようになった。理学部3号館とタンデム加速器の東側土手は、駒込邸庭園の旧地形を残している場所であるが、樹木とクズが生い茂り、うっそうとした林になっていたが、二〇〇九年十二月、樹木の伐採が行われ整備された。不忍池は隣接する建物に遮られているが景観は江戸時代の状態に近づいた。

工学部武田先端知ビルの方形周溝墓は移築保存し、方形周溝墓を調査した位置にタイルで実物大の墓を示し、副葬品として埋納されたガラス小玉をタンデム加速器研究施設の共同利用研究で分析、研究成果と遺跡の研究成果をまとめたパネルが設置された。弥生二丁

目遺跡には史跡解説板が設置され、文京区が「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑近くに、浅野地区の史跡と射的場についてまとめた解説板を設置した。

昭和六十一（一九八六）年、弥生町会創立三十周年記念事業として有志の寄付によって建立された、「弥生式土器発掘由来の地」碑の裏面の建碑のことばに

「弥生式土器は、ここ向ヶ岡弥生町（現・弥生二丁目）内の数カ所から初めて出土発見され、町名を冠して「弥生式」と名付けられました。

遠いむかし、人々はこの辺りに住みつき、日本文化の曙を告げたのです。弥生式土器、向ヶ岡遺跡の発見によって、弥生時代という重要な文化期の存在が知られました。私たちは、こうした歴史の壮大で匂やかなロマンを憶いふるさとわが町の誇りを語り継ぎ、出土と命名の史実を末永く顕彰するため、この記念碑を建てました。

昭和三十九年行政措置により、この町は弥生二丁目と変わりましたが、町会名は歴史的な名を継承しております。

昭和六十一年夏　七月吉日　向ヶ岡弥生町会有志」

と刻まれている。現在も住民の歴史への関心は高いが、これまで浅野地区には遺跡や史跡を実際に見学できる施設はなく、研究棟が林立した構内から歴史や景観を感じることは出来なかった。しかし、最近の整備によって史跡の見学ができるようになり、二〇〇一年の工学部武田先端知ビルの発掘調査をきっかけに始めた、弥生時代から現在までの向ヶ岡弥生町の研究によって、向ヶ岡の歴史と景観の素晴らしさ、この地に歴史を刻んだ人々の思いを知ることができた。今後も研究を進めるが、研究成果に裏打ちされた出土遺物・遺跡の活用、住民への研究成果の還元も継続して続けて行きたい。

図９　「向岡記」碑
浅野地区情報基盤センター内

図 10　「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑

謝辞

二〇〇一年の工学部武田先端知ビルの発掘調査から報告書作成、本論執筆にあたり、以下の方々にお世話になりました。ここに謝辞申し上げます（敬称略）。

青木　誠、青木　哲、浅野長孝、飯村　博、池田悦夫、石川日出志、石原道知、仰木ひろみ、岡田靖雄、岡山輝明、小野田恵、風祭　元、加藤元信、香取祐一、菊池　力、小泉好延、小林善行、小林達雄、斎藤　忠、斎藤洋一、塩原　都、清水謙多郎、鈴木健之、鈴木暎一、鈴木啓介、鈴木政治、谷川章雄、垂水　桃、知念　理、寺島孝一、徳川斉正、徳川眞木、戸田宏之、永井　博、中野忠一郎、成瀬晃司、福　雅彰、細谷恵子、堀内秀樹、堀江武史、堀切重明、宮崎勝美、森田信博、山本　實、横山淳一、渡辺貞幸、渡辺延志、梶原慶子、山崎範子、山田しげる、森まゆみ、水谷　仁、藤尾隆志、蕨　俊夫、蕨　由美

㈶水府明徳会彰考館徳川博物館、弥生町会、文京区教育委員会、文京ふるさと歴史館、谷根千工房、東京大学広報センター、東京大学工学部武田先端知ビル、東京大学情報基盤センター

参考文献

警視庁『警視廳史稿』上下巻（東京都公文書館蔵　明治期）

警視庁史編さん委員会一九五九『警視庁史』

警視庁創立百年記念行事運営委員会一九七四『警視庁百年の歩み』

石川日出志二〇〇八『「弥生時代」の発見　弥生町遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ　新泉社

東京大学埋蔵文化財調査室二〇〇九『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究報告書9　浅野地区Ⅰ』

原祐一　二〇〇九「附編　水戸藩駒込邸の遺跡と『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』、明治十六年『測量図』の検討」株式会社裕企画、東京都文京区教育委員会『B-86　東京都文京区　弥生町遺跡群　第2地点―個人住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』p.10

図 11　方形周溝墓の展示
浅野地区武田先端知ビル内

〈注〉

（1）清水謙多郎の調査によれば碑は少なくとも5回移転している（「朱舜水先生終焉之地」の碑の変遷について」）。現在の位置は駒込邸内ではなく、江戸時代後期は駒込邸に隣接する町屋であった。

（2）原祐一執筆・編集・発行二〇〇八『「向岡記」碑　保存修復報告書「向岡記」碑の研究　二〇〇八年十月十二日　石原道知、小林善幸、塩原都、関岡裕之、垂水李、堀江武史、原祐一、森田信博、丸茂一美、横山淳一』

（3）岩淵令治二〇〇〇「はじめに～文献調査の経緯と課題設定、第一節　発掘地点の変遷と拝領者－水戸藩の拝領屋敷の変遷・小石川邸の変遷」文京区遺跡調査会『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点　文京区埋蔵文化財発掘調査報告書第20集』pp.153-159他

（4）原祐一、堀内秀樹二〇〇六「水戸藩駒込邸の土地利用状況―発掘調査の成果と文献史料の検討―」『文京ふるさと歴史館特別展　徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る』pp.32-41

（5）太田南畝　文化五年『向岡閑話　上巻』関根正直、和田英松、田辺勝哉監修一九七五『日本随筆大成　第一期13』P.235所収

（6）東京都一九六四『東京市史稿　市外編第五十五』p.747

（7）石井研堂一九四一「第六編　宗教部　向ヶ岡弥生神社」『改訂増補　明治事物起原　上巻』（ちくま学芸文庫一九九七『明治事物起原3』p.433）

（8）中川泰昌編一九六五『新聞集成明治編年史第五巻　民論大弾壓期』（再版一九三四初版）明治新聞集成明治編年史頒布会 p.108

（9）中川泰昌編一九六五『新聞集成明治編年史第五巻　民論大弾壓期』（再版一九三四初版）明治新聞集成明治編年史頒布会 p.73

（10）宮内庁一九七一『明治天皇紀　第五』吉川弘文館 pp.731-732

（11）昭和九年十二月十日発行、昭和四十年九月一日再発行『新聞集成明治編年史　第五巻　民論大弾圧期』中山泰昌編著、木之内丑之助発行者、新聞集成明治編年史頒布会 p.350

（12）石榑顕吉二〇〇〇「浅野キャンパス余話」『工学部ニュース』№358、359、360東京大学工学部ニュース編集室二〇〇〇三〇一 pp.19-20

（13）岡田靖雄一九八一『私説松沢病院史―一八七九～一九八〇―』岩崎学術出版社

（14）建設省国土地理院所蔵・（財）日本地図センター複製一九八四「明治十六年第一測期第二測図　参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』

（15）原祐一　二〇〇七「弥生時代名称由来土器発見場所の推定―明治十七年本郷区向ヶ岡弥生町の土地利用状況―」『國學院大學考古学資料館紀要』23輯 pp.125-142

（16）広島県立美術館二〇〇九『―知られざるサムライ・アート―　大名庭園展』現在、縮景園の対岸に桃が植樹され「長

堤桃花」が再現されている

(17) 「西湖十景　（中略）蘇堤遍植花木、四季風景不同。春季桃紅柳緑、景色尤佳。漫歩堤上、看暁霧中西湖甦醒、新柳如煙、意境動人、故稱「蘇堤春暁」」光復書局編輯部編著、林春輝、光復書局企業股份有限公司発行一九九七『中國地理大百科　浙江・福建』p.76

(18) 之潮編集部編二〇〇七『寛永江戸全図　仮撮影版（之潮編集部編・全2葉）』、金行信輔二〇〇七『寛永江戸図　解説　之潮編集部編　寛永江戸全図　仮撮影版（之潮編集部編・全2葉）別冊）』

(19) 名著出版一九八六『御府内寺社備考』第四冊古義真言宗・真義真言宗・臨済宗 pp.216-218

(20) 9農学部家畜病院地点出土遺物の分析は現在執筆中である。

(21) 成瀬晃司「新タンデム棟建設予定地点試掘調査報告」（未報告一九八八年調査）

(22) 坪井正五郎一八八九「帝国大學の隣地に貝塚の痕跡有り」『東洋学芸雑誌』第六巻九十一号 pp.195-201 他

(23) 文京区一九八五『本郷区史』復刻版「第二編　本郷通史　第四章　江戸氏時代の本郷　片岡八郎の墳」一九三七『本郷區史』pp.44-48、文京区一九六八「Ⅲ武家生活の展開と文化　一武家地の大勢　2武家地の整備　水戸家別邸の縄張り」『文京区史巻二』p.303、東京都一九六四『東京市史稿　市外編第五十五』p.747

(24) 進士五十八　二〇〇八「風水術　安心の環境立地計画」株式会社中央公論新社『日本の庭園　造園の技とこころ』中公新書一八一〇（二〇〇五初版）

(25) 「明治十五年向ヶ岡射的場引受ノ件」附図『公文録』国立公文書館蔵

(26) 「別邸平面図」『明治四十二年調家屋台帳』（青木家文書　青木誠蔵）

(28) 原祐一　二〇〇八「東大構内発掘調査より　発見された砲弾と上野戦争」『地域雑誌谷中根津千駄木』（季刊）其の九十三　二〇〇九年八月十日発行 pp.79-83

(29) 環濠集落（かんごうしゅうらく）は周囲に濠をめぐらせた集落で、弥生二丁目遺跡は昭和五一（一九七六）年、国指定史跡に指定された。方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）は弥生時代の墓で、検出した墓は遺体を埋葬した土壙（どこう）が四条の溝で方形に囲まれていた。

（はら　ゆういち　東京大学埋蔵文化財調査室）